

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32614

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25885070

研究課題名(和文) 小学校国語科の読みと幼稚園領域ことばの教師の教授スタイルに関する研究

研究課題名(英文) A comparative study on teaching style of Japanese language "reading" at primary school and "Language" at ECEC

研究代表者

吉永 安里 (Yoshinaga, Asato)

國學院大學・公立大学の部局等・助教

研究者番号：50714721

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：幼小移行の円滑な移行を促す幼小の教師の教授スタイルを検討した。日本、アメリカ、ベルギーとの国際比較も行った。日本では、幼小とも集団活動であるが、幼では自己発揮が求められ、小では学習規律、自己抑制を求める傾向にあった。また、小で文字指導が行われる他、言語性の促しレベルは幼小とも変わらなかった。アメリカでは、ともに文字指導が行われ、高度な言語性の促しがなされていた。幼小とも個別活動が多く、自己抑制を求める傾向が強かった。ベルギーも幼小とも集団活動で、幼では自己発揮、小で自己抑制を求めている。文字指導は小から行われ、言語性の促しは幼稚園は日本の幼より低く、小は同程度であった。

研究成果の概要(英文)：My research studied teaching styles by which the teachers promote smooth transition from ECEC to primary school. The research includes a cross-cultural study in Japan, Belgium, and the US. The teaching in both ECEC and primary school in Japan is conducted via group activities, and pupils are expected to demonstrate their abilities more in ECEC than in primary school, where a learning discipline and self-control are prioritized. Teachers' initiations to enhance language capacity are of a similar challenge level at both stages, except that letters are taught from primary school. In the US, letters are taught from ECEC, and the teachers' initiations are of a higher level than in the others. The teaching is on an individual basis and self-control tends to be expected at both stages. Belgium has a similar teaching style to Japan, but the initiations in ECEC are of a lower level than those in Japan while in primary school they are of a similar level. Letters are taught from primary school.

研究分野：国語教育

キーワード：幼小連携 言葉 国語 教授スタイル

### 1. 研究開始当初の背景

申請者は以前、幼稚園から小学校へ職場を移った際に、幼稚園教諭と小学校教諭の子どもへの関わり方の違いを目の当たりにし、衝撃を受けた経験がある。そのような教師の関わりを直に受ける子どもにとっては、その違いはなおのこと大きく衝撃的に感じられることであろう。

このような申請者自身の直接的な経験から、本研究においては、幼から小に移行した子どもたちが、教師の子どもへの関わりに大きな不適応を感じるのではないかと、それが「小1プロブレム」の原因にもつながっているのではないかと、という仮説をもった。

しかし、1990年代後半からクローズアップされ始めた「小1プロブレム」に関しては、教師の関わり方の幼小間の差異よりも、子どもたちを取り巻く社会の変化や、その影響を受けた子どもの側の問題に焦点が当てられ、その改善策として、幼小の子どもとの交流やカリキュラム開発が主な研究対象となってきた経緯がある。新保(2010)は、「小1プロブレムとは、授業不成立という現象を中心に、学級が本来持っている学び・遊び・暮らしの機能が不全になっている、小学校1年生の集団未形成の問題」であり、その要因として、「子どもを取り巻く社会環境の変化が、子どもの育ちを変化させていること、

親の子育ての孤立化と未熟さ、子どもも親も自尊心が低く、人間関係づくりが苦手、就学前教育と学校教育の段差の拡大、自己完結し、連携の少ない学校園、今の子どもにミスマッチの頑固な学校文化や学校教育システム、を挙げている。就学前教育と学校教育の段差について言及されているものの、その実態が明らかにされないまま、行政・学校単位でのカリキュラム開発や、小学校生活科に位置付けられる学校間での交流会、あるいは幼小の教員の人事交流といった幼小連携の改善の取り組みについて研究が重ねられてきている。

そこで、本研究においては、新保(2010)が4つ目の要因として挙げている就学前教育と学校教育の段差の拡大、特に教師の子どもとの関わり方の段差に焦点を当て、就学前教育と学校教育の実態を明らかにすることで幼小接続のよりよいあり方を探究することとする。

### 2. 研究の目的

本研究では、就学前教育と小学校教育の接続期に起こる「小1プロブレム」について、保育・授業中の教師の子どもへの発言やふるまい、環境設定といった教授スタイルのあり方、教材の取り扱い方の観点から問題点を明らかにする。特に、小学校で最も多く指導時間が取られる国語教育とそこにつながる就学前教育の領域「言葉」の指導における教師の教授スタイルについて詳しく考察することとする。

また、日本だけでなく、世界の幼小連携のあり方と国際比較を行うことにより、我が国の幼小連携の特徴と改善点をより明確にする。

その上で、子どもたちが就学前教育から小学校教育へ円滑に接続するための教授スタイルについての提言を行うこととする。

### 3. 研究の方法

上記の目的について、以下の3つの観点から検証を行う。

- (1) 幼稚園、小学校の共通教材と言える「おおきなかぶ」の読み聞かせ・授業場面を観察し、その双方の段階の教師がそれぞれどのような教授スタイルをとっているか分析・考察を行う。
- (2) 「おおきなかぶ」の教材の取り扱いに関する幼稚園・小学校両教諭の意識の差異を、双方の教師に作成してもらった部分指導案の記述から分析・考察を行う。
- (3) 世界の幼小連携のあり方と我が国のあり方の国際比較を行うため、アメリカ(コロラド州ロングモント)とヨーロッパ(ベルギー・オーデルゲム)の幼小学校での観察調査を行い、各国教師の教授スタイルについて分析・考察を行い、日本のデータと比較検討を行う。

就学前教育と小学校教育の比較にあたって、本研究では学びの連続性に焦点化し、同じ学校教育に位置づけられる幼稚園と小学校の比較を行うこととした。観察場面も、幼稚園の領域「言葉」の絵本の読み聞かせ場面と小学校国語科「読むこと」の文学的文章の授業場面に限定した。これは、どのような保育形態の幼稚園でも、絵本の読み聞かせは集団一斉指導の形態が取られることが多く、小学校の授業と類似の条件下で比較が可能、どちらも主に物語教材を扱っており、特に小学校低学年の教科書教材と幼稚園で読み聞かせされる絵本は共通性が高い、という2つの理由からである。

また、教材の違いによる教師の反応に差が出ないよう、幼小両校種で共通して取り扱われることの多い「おおきなかぶ」を教材として選定した。「おおきなかぶ」は、平成23年度版小学校1年生の国語教科書5社すべてに掲載されており、ほぼ100%の小学生が学習する教材である。また、幼稚園でも、本稿で観察した小学生への聞き取りでも入学以前に「おおきなかぶ」を読んだ経験のある子はほぼ100%、幼稚園教諭へのインタビューでも、どこかの学年で必ず読み聞かせをしているとのことであった。「おおきなかぶ」は小学校では100%、幼稚園においても大多数の子どもたちが接する、幼小共通教材と言える。調査方法：幼稚園3園7学級、小学校4校5学級を対象に、幼小両校種の教師が「おおきなかぶ」をどのように扱っているか、その教授スタイルを検討することとした。分析は、保育・授業場面のビデオ記録から、教師及



表2 小学校における言語性の教授スタイル一覧

教員		4NB		4NC		4ND		4NE	
小学校	国立附属	国立附属	私立附属	国立附属	私立附属	国立附属	国立附属	公立	公立
経験年数(約)	10年	20年	10年	10年	35年	2013.6.27(4時間目)	2013.7.5(2時間目)	2013.7.12(4時間目)	15年(うち10年)
「おおきなかぶ」の取り扱い方	教科書(教育出版)	絵本(福音館)	教科書(学校図書)	教科書(学校図書)	教科書(光村出版)	絵本(福音館)教科書(教育出版)	教科書(光村出版)	教科書(教育出版)	絵本(福音館)教科書(教育出版)
成書パターン	インフォーマル/type Gの応答パターン(世界の言語の題名当て、どこの国のお話か、訳者)	インフォーマル/type Mの応答パターン(かぶの大きさ)	インフォーマル/type Gの応答パターン(登場人物と登場順の確認)	インフォーマル/type Gの応答パターン(登場人物と登場順の確認)	インフォーマル/type Mの応答パターン(おおいさんの様子、おおきな、おおきなのお繰り返しの意味、抜けた時の人物の気持ち、お話の感想)	インフォーマル/type Mの応答パターン(おおいさんの気持ち)	インフォーマル/type Rの応答パターン(おおいさんの気持ち)	全員で一斉回答/type Gの応答パターン(登場人物と登場順の確認)	全員で一斉回答/type Gの応答パターン(登場人物と登場順の確認)
話し方	つぶやきの受け止め 対全体へのパブリックな話し方	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め	つぶやきの受け止め
学びの内容	教師の範読(子どもは指さし読み) 動作化(かぶの大きさ) 代表児童の劇化と本文の照合 教材提示(かぶ) お話の表現特性へ気づき(この本は、しきたりだね。読んでる間にみんなななびっぴりた(なっちゃん)) 全体でのノート指導(マスの使い方、書く内容、赤鉛筆) 個別のノート指導	絵本の読み聞かせ(授業始め、教師と途中から子どもも、授業終り、全員) 教材提示(かぶ) 構造化された板書(色チョーク、矢印) お話の表現特性へ気づき(この本は、しきたりだね。読んでる間にみんなななびっぴりた(なっちゃん))	音読(音読) 暗唱できる子への肯定的評価 音読の状況の確認 訳者の確認 全体でのノートの指導(新しいページ、マスキング、<>の書き方) 個別のノート指導 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」がありましたね、それを扱ってきた人が、おおいさん、おばあさん……)	音読(音読) 暗唱できる子への肯定的評価 音読の状況の確認 訳者の確認 全体でのノートの指導(新しいページ、マスキング、<>の書き方) 個別のノート指導 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」がありましたね、それを扱ってきた人が、おおいさん、おばあさん……)	教師の範読(子どもに「教科書を見てはいけぬ」と指示) 音読(音読) 代表児童の劇化(登場人物の行動) 教材提示(かぶ) 板書	絵本の読み聞かせ(教師と途中から子どもも) 動作化(かぶの大きさ) 実物提示(かぶ) 表書きへの気づきの促し(おばあさん、おばあさん) 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」に入ってはいけません。この子どもは誰ですか?) 全体でのノート指導(新しいページ、マスキング) 個別のノート指導	絵本の読み聞かせ(教師と途中から子どもも) 動作化(かぶの大きさ) 実物提示(かぶ) 表書きへの気づきの促し(おばあさん、おばあさん) 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」に入ってはいけません。この子どもは誰ですか?) 全体でのノート指導(新しいページ、マスキング) 個別のノート指導	絵本の読み聞かせ(教師と途中から子どもも) 動作化(かぶの大きさ) 実物提示(かぶ) 表書きへの気づきの促し(おばあさん、おばあさん) 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」に入ってはいけません。この子どもは誰ですか?) 全体でのノート指導(新しいページ、マスキング) 個別のノート指導	絵本の読み聞かせ(教師と途中から子どもも) 動作化(かぶの大きさ) 実物提示(かぶ) 表書きへの気づきの促し(おばあさん、おばあさん) 登場人物の定義の消極的促し(「かぶ」に入ってはいけません。この子どもは誰ですか?) 全体でのノート指導(新しいページ、マスキング) 個別のノート指導

は行われず、小学校のみであった。

以上の結果から、日本では、小学校に上がると、自発的に学ぶ意欲が低減する可能性があると考えられる。言語性の促しでは、幼から小へ適度な段差を設け、自己抑制ばかりを強調するのではなく、自己発揮できる場面も設けることで、子どもの言語性と学習意欲を幼児期から継続して高めていくことが必要であろう。

しかし、アメリカのように、幼稚園から高い言語性を要求することは、子どもに「できない」という不全感をもたらす可能性もある。実際にアメリカでは、多くの子どもたちが一人では課題を遂行できない状態にあり、先生や TA が学習の補助をして、なんとかやり遂げるといった様子であった。

アメリカのように少人数のクラスで、かつ学習補助が入り、個別の活動で展開していく方法でなく、日本のように一斉授業を行う場合は、全体の活動の中で子どもが取り組み、達成することのできる発達に即した適切な促しのレベルを教師が考慮することが重要であると言える。

(2)教材の取り扱いに関しては、幼稚園・小学校の共通教材といえる「おおきなかぶ」の取り扱いに対する意識調査を行った。

幼稚園教諭に対する調査を終え、現在分析中である。また、小学校教諭に関しては現在調査中である。幼稚園教諭に関しては、「おおきなかぶ」を単に言語性を促す手立てと限定せず、多様な力を総合的に育むことを企図していたものが多かった。また教材を通した学びをその後の遊びや生活と結び付け発展させていく意識があることも明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

吉永安里、幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相 自覚的な学びを促す教師の関わりに着目して、國學院大學人間開発学研究 第 5 号, 2014, pp. 81-98.

〔学会発表〕(計 2 件)

吉永安里、幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相—言語性を促す教師の関わりに着目して—、第 128 回兵庫大会研究発表要旨集, 2015, pp. 19-22. 全国大学国語教育学会

吉永安里、幼稚園・小学校における「おおきなかぶ」の教授スタイルの様相: 「自覚的な学び」の観点から、第 125 回広島大会研究発表要旨集, 2013, pp. 361-364. 全国大学国語教育学会

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉永安里 (YOSHINAGA, Asato)  
國學院大學・人間開発学部子ども支援学科・  
助教  
研究者番号：5 0 7 1 4 7 2 1

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：